

P 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	○	○	●	○	○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

何十年かぶりに高い山に登ることになった人が、ようやく稜線りやうせんに出てその峰みねを目にした時、昔とすこしも変わらぬその姿に感動させられて、そのことを若い同行者に話したところが、山はどこにも行きませんよ、と笑われたという。それはそうには違いないが、この高年の男性の驚きが私にはよくわかる。ここ二十年三十年、その峰などはどこか他界へ消えたような、そんな暮らしてあったのだ。

戦後の日本で登山熱の高まった時期が二度あると聞く。一度は昭和三十年代に入つて経済成長に加速のつき出した頃、もう一度は平成に入つてバブルのはじけた頃からだという。前者は高度成長の入口にあたり、これに辻褄つじぎを合わせれば、後者は出口ということになるが、先のことはまだわからない。

この二度にわたる登山熱に同一人物として加わっている人たちもいる。この私と同じ年代の高年者たちである。昭和三十年代の初めの大学の構内では、七月に入ると、生協の前にテントの出店が張られて、そこにキャラバンシューズや、ナップザックやキスリング(注2)が並んだ。その賑わいが夢の光景のように目に映つたのは、敗戦後の貧困からまだ遠からぬ頃のせいだった。ウインドヤッケ(注3)もあつたが、これは貧乏学生にはちよつと高くて、親父の古昔広で間に合わせた。ウールの三つ揃いの古着があれば最高だった。ナイゲルと呼んだ本格的登山靴、ラジュースと呼ばれた加圧式の小型石油コンロ、シュラフとは寝袋、ツェルトと呼ばれた簡易テント、それに本式のテント、ピッケルまで並んでいたが、これらはとても手が届かず借りて回った。初期には地下足袋や軍靴が山で見られた。山小屋泊まりには二合の米を持参したが、米はまだ、喰う前に拵ぐものだった。二升ほどの米を二千メートル以上の稜線まで担ぎ上げたものだ。

シュラフ、寝袋は秋葉原あたりで米軍の放出品が安く買えて、それはありがたかったが、さて山に入つて夜になり、テントの中でそこに潜りこむと、じつはこれは朝鮮戦争の戦死者たちの遺体を包んで日本まで運び、棺ひつぎに納めた後で無用になつた物だそうだとそんな噂がこんな時に思い出されて、なるほど、生きていても死んで

いても、人体をすっぱりくるむには具合よくできているものだと思つても、ホルマリンの臭いが染み
てくるようで、そこは若いので一所懸命に、女性のことを妄想して、これをしのいだ。夜が明けて袋の中から這
い出すと、縫い目のホコロんだところから零れた羽毛が全身にこびりついて、なにやら昨夜の妄想の名残りのよ
うで、セイジョウな山の朝の空気に、うしろめたかった。

若い頃にそんな体験をした人がまもなく経済世界の渦中に放りこまれて、山は年々遠くなり影も見えなくなり、
さて三十年、三十五年して、山は見えなくなったかわりに停年が、あるいはリストラが行く手に見えてくる。往
古の中国の役人に、年老いて致仕つまり退官する際に、骸骨を乞う、という言い方があり、つまり、長年身をす
りへらしてお仕えしまして、お蔭さまで骸骨だけになってしまいました。が、せめてその骸骨はおさげください、
というほどの心になり、なかなか品よく恨みつらみをこめた言葉と思われるが、なかに、骸骨だつて、こいつは
もう俺のもんだ、いっそ陽気な骸骨になつて、昔の山へ登るか、とこれもひとつの、山に行く心か。

山が昔とすこしも変わらぬ姿を現わしたのには、なおさら驚いたはずだ。あれは夢か幻か、それとも眺めてい
る自分こそ、夢か幻か、と首をかしげたかもしれない。

あまりにも存在感の強い物を目を見ると、それがかえつて夢幻めいて見えてくる、ということはあるものだ。
稜線で朝の霧が晴れて、目の前に針ノ木岳が聳え立つた。北へ連なる後立山の峯々も手に取るように見える。二
十歳になる前の七月のことだ。

手に取るようにとは、物の表現でしかない。見たというのものもあるいは同様に、物の表現でしかないのかもしれ
ない。ただもう圧倒されていた。感嘆する余裕さえしばらくなかった。自分がまさに吹けば飛ぶ存在、いや、そ
もそもここにいることが不思議に感じられた。自分がここにおいて、そして山を見ている、という当たり前の関係
が通用しなくなつた。山があつて自分はいない。そのほうが自然だが、しかしそれではなぜ、山が自分に見えて
いるのか、と大まじめに首をひねっていた。

その時のことだ。山が稜線と岩肌を克明に現わしたまま、谷から昇る沢の音を響かせたまま、そのまま夢幻に見えてきた。物の存在感がある程度を超えると、人の感覚は追いつけなくなるものらしい。しばらくは耳も響されたようになり、岩尾根を掠めて飛ぶ岩燕の声だけが聞こえていた。

カメラというものを私は持たなかった。同行者はスライド用の写真を熱心に撮っていたが、それから五年ほどして亡くなった。だから、その時の記念品は私の手もとに何ひとつない。記憶のほうも二十年三十年と経つと、山の姿を思い浮かべながら、自分はほんとうに、そんなところへ行つたのかしら、と怪しむようになった。地図帳を取り出して針ノ木岳のありかを確かめると、そんなことは記憶の証拠にもならないのに、安心するから妙である。思い浮かべるなどと言ったが、じつは姿などよくも見えていないのだ。これは記憶の薄れではなくて、あの時すでに、山の姿形を目でしっかり掴みきれていなかったのではないかと疑える。かわりに、朝の光に染まつて谷の音を響かせる岩肌が、そこにあるのだ。自分は稜線上のどこにもいない。

親類の法事の席で、色即是空、空即是色、と経の中から聞こえた時、針ノ木岳が浮かんだ。色不異空、空不異色と聞こえて、もう一度浮かんだ。色ハ空ニ異ナラズ、空ハ色ニ異ナラズとは、果敢なげなことではなくて、自分を無限に超える力に圧倒された心のことか、と一瞬得心のようなものが動いたが、すぐに取りとめもなくなつた。

それからまた何年もして、空海のこんな言葉に目がとまった。

色ハ空ニ異ナラズ、諸法ヲ建テテ宛然トシテ空ナリ。

空ハ色ニ異ナラズ、諸法ヲ泯ボシテ宛然トシテ色ナリ。

諸法とは万有と取つていいのだろうか。万有を建てながら、 空である、万有を泯ぼしながら、 色である、と読むとまた針ノ木岳の、今度は音だけが鳴り響いたが、こういうことには私はいかにも悟りが遅いので、この対句を葉書大の紙に書き留めておくだけにした。

その後、私は病氣をして、手術後の身動きの取れぬベッドの中から、なま殺しのような眠りだと自分でこぼし

ていたが、半分眠りながら半分は覚めて、山道を登る夢をしばしば見た。重い荷物を背負って、一步一步がもう苦しいのに、先はまだ長い。行けば行くほど、先は長くなる。もう何十年も前に山登りはやめているのに、夢とは言いながらおかしなことだ、と怪しんでも、実際に苦しいんだから仕方がない。そのうちに、いきなり、稜線に立っている。やれ、済んだかと息をつきかけるとしかし、理不尽なことに、まだ登りに苦しんでいる自分がいる。この苦しみは永遠に、過ぎてても過ぎないぞ、何ひとつ、過ぎることなど、ありはしないのだ、と呻いて目がすっかり覚める。

それでも人間は楽天的に出来ているようだ。半月も首を固定されて仰向きに寝たきりを強いられたが、途中で先の長さを思つて絶望したことは一度もなかった。山に登るとは楽天の極致だと若い頃には我ながら思つたものだが、生きるということ自体が、どうも楽天であるらしい。退院してしばらくは、自分の立居の一々がめでたいように感じられて、昔、何かにつけてナマンダブ、ナマンダブと唱える年寄りがいたものだが、あれに近いかと呆れた。

病氣も遠くなった頃、年々かなり長い時期にわたって山小屋に仕事でこもるといふ青年が、都会に戻つて電車に乗ると車内の若い女性がたいてい観音さまか弁天さまに見えると話すのを聞いて、ひさしぶりに山の帰りを思い出した。夜行で松本を発つて、すぐに熟睡して途中も知らず、目を覚ますともう明けかけた都内に入っている。新宿に着いて山手線に乗り換えればまだ早朝で車内はカンサンとして女性の姿もすくないが、まさに青年の話すとおりだった。女性の顔の、線が柔和で、なにやら慈悲深そうにさえ見える。

しかし五反田の駅で降りて私鉄の切符を買つと、財布にはたいていもう、十円玉が二つ三つしか、残つていなかったな、とついでに色気もないことを思い出した。松本の駅前で蕎麦か井物を喰つて最後の百円札をはたいた。文無しで、腹もすいている。ずいぶん汗臭いことだったろう。顔も浅黒い。汽車の中でぐっすり眠つているので、頭の中はからんと澄んでいるが、疲れが節々に溜まつて、膝がふわふわする。その足を一步一步、跡でもつけるように、踏みしめて行く。山に行く足取りではないか。女人に感じるほかは無念無想の、山の聖が朝の街を行く。

(古井由吉『聖なるものを訪ねて』による)

(注)

- 1 キヤラバンシューズ——ゴム底の軽登山靴。
- 2 キスリング——登山用の大形のリュックサック。
- 3 ウインドヤッケ——防風、防寒用の上着。
- 4 針ノ木岳——北アルプスの一部である後立山連峰最南端の山。

問

(A) 線部(イ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 線部(あ)について。本文中での意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、それぞれ番号で答えよ。

- (あ) 往古
- 1 さほど遠くない過去
 - 2 有史以前の過去
 - 3 神話の時代
 - 4 過ぎ去ったむかし
 - 5 はかりしれないほどむかし

- (い) 果敢なげな
- 1 痛々しくあわれない
 - 2 とりとめがない
 - 3 大胆で思いきった
 - 4 思い通りにいかない
 - 5 力の弱い

- (う) はたいた
- 1 すっかりなくしてしまった
 - 2 強がった様子で差し出した
 - 3 景気よくふるまった
 - 4 なげやりに使った
 - 5 思いきりよく支払った

(C) 線部(1)について。「若い同行者」はなぜ笑ったのか。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 変わらぬ山の姿を当たり前に思っていた若い同行者が、登山の愛好者とも思われない男性の言動を不快に感じたから。

2 わずか数十年の間に山の姿が変わってしまったと思っていたかのような男性の言動が、若い同行者には滑稽に感じられたから。

3 変わらぬ山の姿に対する感動をあまりに性急に伝えようとする男性を、若い同行者が穏やかにたしなめようとしたから。

4 山の姿が数十年の間にすこしも変わっていないことに感動する男性の言葉が、若い同行者には奇異に思われたから。

5 若い同行者が、昔とすこしも変わらぬ山の姿に登山の初心者のように感動する男性の様子に、好感を抱いたから。

(D) 線部(2)について。この説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 登山を楽しむよりも、当面の生活をどうするかということがまだ重要な課題であった。

2 自分のことよりも、他の登山者が米を食べられるようにすることを優先する気持ちが強かった。

3 敗戦後の貧困からまだ完全に脱してはおらず、米には貴重な食料という感覚があった。

4 食事を楽しむ前に、それにみあった肉体的な労働を求められる雰囲気があった。

5 山小屋を利用するものは米を持参するという戦争中のルールが、戦後になっても適用されていた。

(E) 線部(3)について。「これ」が指す内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 米軍の放出品の寝袋から連想される戦争の苦い記憶

2 寝袋に染みこんだホルマリンの臭い

3 夜の山の中で一人寝袋に入っている孤独感

4 寝袋は朝鮮戦争の戦死者の遺体を包んだ後で無用になった物だという噂

5 戦死者たちの遺体を包んだかもしれない寝袋の中にいる恐怖

(F) 線部(4)について。このような思いの説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 仕事を全うして疲弊したとはいえ、窮屈な宮仕えから離れた自由を楽しみたい。

2 どんなに粗末な物でも、もらえる物は受け取っておこうとする貪欲な気持ちになっている。

3 身をすりへらして宮仕えした結果、疲弊してしまった恨みつらみを言葉にしたい。

4 人生の終盤にさしかかって、すっかり身をすりへらしてしまった自分に自棄になっている。

5 最後に得られたのは粗末な物であっても、過ぎ去った人生の充実を自負したい。

(G) 線部(5)について。私が「なおさら驚いたはず」と考える理由を最もよく表している一文を、本文中から抜き出し、初めの五字を句読点とも記せ。

(H) 線部(6)について。この説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 自分が稜線上のどこかにいたという事実よりも、朝の光に染まった岩肌があったという事実が重要である。

2 山の姿を見ていたはずの自分は、山の存在感に圧倒されて感覚する存在としての自分自身を失っていた。

3 数十年前の山の記憶は薄れてしまい、自分が稜線上のどこかにいたという感覚を再現できなくなっている。

4 自分の存在はあまりに小さいので、稜線上のどこかにいたかを思い出すことにはほとんど意味がない。

5 まだ若かった自分は、山の姿を落ち着いて観察し、その姿形をすっかり掴む精神的な余裕がなかった。

(I) 本文中に二箇所ある空欄 [] には同じ言葉が入る。空欄 [] を補う言葉として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 次には
- 2 それでも
- 3 すべて
- 4 そのまま
- 5 結局

(J) ——線部(7)について。「山の聖」とはどのような存在か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 修行に似た登山の経験を通して、人生に関してぬきんできた認識に到達した存在
- 2 圧倒的な存在感のある山の姿を知って、人間世界を超えた聖なるものに目覚めた存在
- 3 山の修行僧のように、経済的に苦しくても新しい人生経験を求めようとする存在
- 4 登山の最中に経験した無我の境地を、現実世界の中で再現しようとする存在
- 5 自分を無限に超える山の力に触れて、あくせくせずに現実を歩もうとする存在

(K) 左記各項のうち、本文の内容と合致するもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 戦後の二度にわたる登山熱の高まりに、私は同一人物として加わっている。
- 2 物が夢幻に見えてくるのは、その存在感が人の感覚を超えてしまったときである。
- 3 十代の頃の私の登山経験は、写真を撮っていた同行者の死によって確証のないものになった。
- 4 私は若い頃の登山で経験したことの真の意味を、後に知った空海の言葉によって理解した。
- 5 入院中の私は、理不尽に苦しい登山の夢を見て、生きるということ自体が楽天だと思った。

二 左の文章は、丹藥をつくる過程で人が誤つてそれを服用した事故をめぐる話である。これを読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

予^{われノ}中^(注1)表兄、李善勝、曾^テ与^ニ数年輩^{リテ}鍊^ニ朱砂^(注2)為^{ツクル}丹^(注3)。
 經^テ二歳^ヲ、因^ニ沐^(注4)砂^ヲ再^ビ入^{ルルニ}鼎^ニ、誤^{リテ}遺^ニ下^ス一塊^ヲ。其徒
 丸^{メテ}服^{レシ}之^ヲ、遂^シ發^シ憊^(注5)、冒^ラ一夕^{ニシテ}而斃^ル。朱砂^ハ至良^ノ藥^{ニシテ}、
 初^ニ生^ル嬰子^ノ可^{キモ}服^ス、因^ニ火^力所^ニ變^{スル}、遂^シ能^ク殺^ス人^ヲ。以^テ
 变化^ノ相對^シ言^{ハバ}之^ヲ、既^ニ能^ク變^{ジテ}而為^{レバ}大毒^ト、豈^シ不能^ク變
 而為^レ大善^ト。既^ニ能^ク變^{ジテ}而殺^{セバ}人^ヲ、則^チ宜^{シク}有^ル能^ク生^{カス}人^ノ
 理^{。但}未^ダ得^ル其^ノ術^ヲ耳^{。以}此^ヲ知^ル神^仙羽^化之^方、
 不可^ク謂^フ之^ヲ無^シ、然^{レトモ}亦^シ不^レ可^ク不^レ戒^ム也。

〔夢溪筆談〕による

(注) 1 中表兄——いとこ。

2 朱砂——硫化水銀。加熱すると水銀に変化する。不死の仙人を目指す錬丹術において薬材としてよく使われた。

3 丹——服用すると不死になれるという丹薬。 4 沐砂——丹薬を錬成する工程の一つ。砂は朱砂のこと。

5 擲冒——昏睡状態に陥ること。 6 既——すでであるのだから。

7 羽化——羽が生えて仙人になること。

問

(A) 線部の「遂」と同じ読みみの文字一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 卒 2 巳 3 常 4 将 5 与

(B) 線部(1)について。その例に該当するものとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 朱砂は大毒にもなれば、大善にもなる。

2 長く生きる人もいれば、早く亡くなる人もいる。

3 薬の作用はそれを服用する人によって変化する。

4 朱砂は人を仙人にもすれば、若返らせもする。

5 薬の力が強いほど、早く仙人に変わる。

(C) 線部(2)の訓読として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 なんぞへんずるあたはずしてたいぜんとならんや

2 なんぞよくへんじてたいぜんとならざらんや

3 あにへんずるあたはずしてたいぜんとならんや

4 あによくへんぜずしてたいぜんとならんや

5 あにへんじてたいぜんとなるあたはざらんや

(D) 線部(3)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(E) 線部(4)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 いったん仙人になった後でも、無為に過ごす人と人に戻る

2 仙人になる処方は、無いと言われない

3 仙人になるのは、無の境地に至ることを言うのではない

4 仙人になる処方、無いとは言えない

5 薬の力で仙人になろうとする人がいなくなるわけではない

(F) 本文の内容と合致するもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 朱砂は、赤ん坊は服用できるが、大人が服用するのは危険である。

2 李善勝は仲間をだしぬいたため、とうとう仙人にはなれなかった。

3 火の力は人を死なせてしまうほど恐ろしいものである。

4 人を死なせる力を持つ物質を用いて人を生かすという方法は未確立である。

5 人を生かす道理は、仲間を犠牲にしてはじめて獲得されるものである。

三 左の文章は、『西鶴諸国はなし』の中の一話で、ある盲人の世捨て人が主人公である。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

唐土の公治長は、諸鳥の声を聞き分け、本朝の安倍の師泰は、人の五音を、聞く事を得たまへり。

この流れとや申すべし、ここに伏見の、豊後橋の片陰に、笹垣をむすび、心をゆく水のごとくにして、世を暮らしぬる盲人あり。捨てし身のむかし残りて、ただ人とは見えず。つねに一節切ふきて、万の調子を聞きたまふに、違ふ事まれなり。

ある時に、問屋町の北国屋の二階さしきにて、九月二十三夜の月を、待つ事ありて、宵よりこの所の、若い者の集まりて、お三寸機嫌の、こうた・浄瑠璃、日待・月待、何国も同じさわぎぞかし。旦那山伏の多門院、めでたき事どもを語れば、あるじうれしさのあまりに、「何によらず、御遊興を、御好み次第」。客がたより、「かの一節切を聞く事ならば」との望み、亭主ちかづきとて、やがて呼び寄せける。

まづ吉野の山を、所望して吹く時、茶のかよひする小坊主、箱階子をあがる。聞きて、「油洒すよ」と申されける。大事にかけて、油差持ちしに、はづし置きたる杉戸こけ掛かり、おもはぬ怪我をいたしける。おのおの「これは」と横手をうつて、「只今大道を歩く者は、何人ぞ」と申せば、足音の調子を聞き合はし、「これは老女の手を引き、男は物おもひして行く、顔つき。足取のせはしき、取揚げ婆なるべし」。「それか」と、人をつけて聞かすに、「かの男が申すは、しきりがまゐつたら、腰は我らでも抱きますが、とてもものに、息子を産めば、仕合せ」と申す。大笑ひして、またその次に通る者を聞くに、「二人ぢやが、独りのあし音」と。見せにやれば、下女、小娘を負うて行く。その跡に通るものを、何と聞くに、「これは正しく、鳥類なるが、おのが身を大事がる」といふ。また見に行くに、行人、鳥足の高足駄をはきて、道をしづかに歩み行く。「さてもさても、あらそはれぬ事どもなり。とてもなぐさみに、今一度聞きたまへ」と、いづれも虫籠をあけて、待つに、道筋も見えかね、初夜の鐘の鳴る時、旅人の下り舟に、乗りおくれじといそぐ風情、二階のともし火にうつりて見るに、一人は刀・脇指をさ

して、黒き羽織に、菅笠をかづき、今一人は、挟箱に酒樽を付けて、あとにつづきて行く。あれを問へば、「二人づれなり。一人は女、一人は男」といふ。「宵からの中に、こればかりが違ひぬ。我々見とめて、なる程大小までさして、侍衆ぢや」と申す。「いな事なり。女にてあるべし。おのおの目違ひはなき」と申せば、また、人を遣はし、様子を聞かせけるに、樽持つたる下人に少語くは、「夜舟にて、その樽心掛けよ。酒にはあらず皆銀なり。夜道の用心に、かく男の風俗して、大坂へ買物に行く」と申す。よくよく聞けば、五条のおかた米屋とかや。

(注) 1 公治長——中国の春秋時代、齊の人。孔子の弟子。よく鳥類の語を聞き分けたという。

2 安倍の師奉——未詳。安倍は陰陽師の家で、古い師に安倍を名乗る者が多かった。

3 人の五音——人の発する声や音の調子。

4 一節切——ひとよぎり。尺八の一種で短い竹製の笛。

5 九月二十三夜の月を待つ事——月の出を待つ行事。僧侶・陰陽師を招き誂経させ、親戚・友人らと飲食し、遊び興じた。

6 旦那山伏——常にその家に入り出して、祈禱や仏事などをする山伏。

7 吉野の山——一節切の名曲。 8 箱階子——階段の下が引きだしや戸棚になっているもの。

9 取揚げ婆——当時の助産師。 10 しきり——陣痛。

11 鳥足の高足駄——鳥の足の形に作った高い足駄。

12 虫籠——虫籠窓。縦の格子が多く、虫籠のように見えるので、この名がある。

13 おかた米屋——女主人の米屋。

問

(A) 線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 悠々として
- 2 仏道に励んで
- 3 他人任せにして
- 4 投げやりになつて
- 5 信念に従つて

(B) 線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 生前のことを思い出して
- 2 別れた人に今でも未練を残していて
- 3 以前の生活をなつかしく思つて
- 4 かつての身分の名残りがあつて
- 5 かつての友人はまだ残つていて

(C) 線部(3)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(D) 線部(4)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 「これは危ない」と驚いて
- 2 「これは滑稽だ」と面白がつて
- 3 「これは見事だ」と感心して
- 4 「これは不審だ」と疑つて
- 5 「これは粗忽だ」と叱りつけて

(E) 線部(5)について。実際はどのような「物おもひ」であつたのか。その内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 先を急ぎながらも、老女が転ばないようにと気を配っている。
- 2 老女の手を引いて急かしながら、助産師を早く迎えに行かねばと焦っている。
- 3 もっと近くの助産師に頼めば良かったのではないかと、後悔している。
- 4 妻の出産を気にかけて、できれば男の子が産まれたらよいのにと願っている。
- 5 自分も出産を手伝うので、無事に産まれるはずだと確信している。

(F) 線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ともし火の方に近づいて
- 2 ともし火に照らされて
- 3 ともし火で色あせて
- 4 ともし火に興味をひかれて
- 5 ともし火に気をとられて

(G)

線部(イ)はそれぞれ誰の行為か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。

- | | | |
|------|------------|-------|
| 1 行人 | 2 盲人(世捨て人) | 3 若い者 |
| 4 女 | 5 下人 | |

(H)

線部(7)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 それはおかしなことだ
- 2 それは畏れ多いことだ
- 3 それはもつともなことだ
- 4 それは立派なことだ
- 5 それは腹立たしいことだ

(I)

線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 私の判断のそれぞれに間違いはありません
- 2 二人連れであることに間違いはありません
- 3 私だつて間違いがないわけではありません
- 4 みなさんの間違いではありませんか
- 5 みなさんの判断は一致しているのですか

(J)

左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ この世捨て人は、話し声と足音を聞くだけで、それがどんな人物であるかを言い当てた。
- ロ 下女が小娘を背負って歩いていたので、一人分の足音しかなかった。
- ハ 「茶のかよひする小坊主」は、世捨て人の見事な一節切を聴いて感激し、油をこぼした。
- ニ 「おかた米屋」の主人は、侍と連れ立って夜旅をしていた。
- ホ この世捨て人は、侍の正体だけでなく、酒樽の中身まで言い当てた。